平成 27 年度卒業式　学長式辞

国際平和都市広島に、春の息吹を伝える柔らかな風が吹き渡り、旅立ちの季節を迎えました。今日の良き日、この広島キャンパスにおきまして広島県環境県民局長様はじめ、多くの御来賓の方の御臨席のもとに、245 名の皆さんの門出をお祝いできますことは、教職員一同の、最も喜びとするところであります。ご卒業、ご修了おめでとうございます。さらに、今までしっかりと皆さんを支え、ともに卒業式に参列なされている保護者の皆様にも、心よりお祝いを申し上げたいと思います。おめでとうございます。

卒業生である皆さん、今まさに社会という海に向かって漕ぎ出す港に立っている自分の姿を想像してください。その手には、只今、卒業あるいは修了の証として手渡しました学位記が握られているはずです。その学位記には、例えば学部卒業生に対しては次の言葉、「所定の課程を修めたので卒業を認め、学士の学位を授与する」が記されています。この文言は、それぞれの学科や専攻科あるいは大学院専攻で学んだ知識と技能について、これから海に漕ぎ出す基本的な技術力は備わっていますという大学としての保証を意味しています。

しかし、漕ぎ出そうとする外洋は、決して穏やかなときばかりではありません。嵐の中、牙をむき荒れ狂う波を、乗り越えざるを得ないときもあります。大学の教育のみでは十分には習得できない２つの力が、これからの社会への船出、すなわち航海に求められることをここで、しっかりと自覚して欲しいと思い、今船出する皆さんへの最後の講義を行うことにします。

航海において求められる２つの力とは何でしょうか。その１つは実践力です。いかなる嵐の状況にも立ち向かう勇気と的確な操作、そして判断力がその力の要因となります。それでは、その実践力は、いつ、どのように養われるのでしょうか。これは皆さんが大学で学んだ基本的な力を駆使しながら、これから実際に波を乗り越える数多くの体験の中でしか培うことは出来ません。すなわち、航海の中で得た体験を通し、自分の体の中に経験値として、しっかりと刻みながら実践力を高めて行くことが、これからの皆さんには求められています。波を避けて進むことができる航海はありえません。数多くの困難な波に向かい、自ら進んで行く挑戦が、実践力をつける上で大切であることを、ここでしっかりと自覚してください。

そしてもう１つの力、それは志を抱く力です。航海においては、明確な目的を備えた志を心に抱くことが大事です。

西洋の中世時代の訓話を紹介します。ある建築の現場で３人の男の作業員が同じ労働作業をしていました。レンガを積み上げる作業です。たまたま通りかかった人が、男たちに「何をしているの？」と尋ねました。１人目の男はぶっきらぼうに「ただレンガを積んで

いる」と答えました。2 人目の男は「食うために働いているのさ」と返しました。そして 3 人目の男は、晴れがましく顔を上げてこう答えたそうです。「歴史に残る大聖堂を造っているのさ！」。いかがでしょうか。同じ作業をしながらも、1 人目の男はただの義務としての労働。2 人目の男は生活という目的を労働に付加して作業を語っていますが、3 人目の男は、さらに、素晴らしい志を労働の中に組み込んで作業していることが理解できると思います。3 人の男の顔つきの違い、容易に想像がつくと思います。おそらく志を込めて語った 3 人目の男の作業内容は、心こもったものになるでしょう。そして労働に誇りを持って、生き生きと作業する彼の表情が目に浮かんで来るに違いありません。

これからの社会において、他人の命令や目標の下に、課題を与えられることが多々あるかと思います。しかし、それを作業として、働かされているとのみ感じるのか、あるいは自分の見出した作業の意味や目的を、志のレベルまで引き上げて仕事をするのか、この違いはこれからの皆さんの航海への取り組み方、つまり人生の質においても、決定的な差を生み出します。生きがいをもたらす志は、人から与えられるものではありません。自分が意志を持って作り出すしかありません。この志を生み出し、自分の人生に付加価値として創造する力、これは大学では十分に学べなかったことです。社会の中で、自ら実感しながら作り上げることが求められます。

私の、ここまでの講義を纏めます。最初に、これからの航海にあたって皆さんに、様々な押し寄せる波に対して、果敢に挑む勇気を持って多くの経験を積み、確かな実践力を身に付けて欲しいということを強調しました。乗り越えた自信が、皆さんのさらなる実践力を鍛えるからです。そして 2 番目には、志を自分の心に抱いて、社会の中で働き進むことが、自らの生きがいの向上に結びつくということを語りました。その上でさらに強調したいことは、挑戦から産まれる実践力と志は、決して無関係では無いということです。2000 年以上前の古代ローマの思想家、セネカの言葉がそれを教えています。「険しい道こそが、偉大なる高さに結びつくのである」。困難に対し、敢然と立ち向かう意欲を持ち、自ら鍛えた実践力で乗り越えることにより、さらなる高い志の実現が可能になるということを意味しているわけです。航海における実践力を高めてゆくことが、志の具現化の礎になるということを、皆さんの心に留めて欲しい言葉として紹介しました。

さて、志を抱き絶えず挑戦する心を持って、前に進めと何度も語りました。しかし長い航海においては、立ちはだかるような大波で、一歩も前に進めない状況に陥ることもあるでしょう。ある意味で絶望と思えるような時もあり、塞ぎ込むような気持ちになることも何度か経験するでしょう。そのような場合には、私が高校時代に何度も読み返した亀井勝一郎の「愛の無常について」の中にある言葉が、皆さんを支えてくれるはずです。心の隅にしまっておいてください。「絶望とは生まれ変わるための陣痛」という言葉です。灰色の空に向かって飛ぶ飛行機も雲を突き抜けると、必ず太陽の日射しに出会えるように、耐えながらも、前に進む意欲を持ち続けることが、いつの日か心が震えるような感動を抱く、

志の実現に繋がると信じています。

　これで私の最終講義は終わりました。皆さんが活躍する舞台は、幅広い分野において、広島、この国、そして世界中のいたるところに準備されています。広島県に育てられた自覚と広島キャンパスに学んだことを誇りとして出航してください。さあ、皆さん胸を張り、深呼吸して社会へとしっかりと漕ぎ出してください。県立広島大学の教職員一同は、皆さんの航海をいつまでも応援し、見守っていくことをお約束して、私の卒業式辞を閉じたいと思います。

ご清聴　有り難うございました。

　平成 28 年 3 月 17 日

県立広島大学　学長　中村健一